報恩講厳修

十月三十一日午後二時より
十一月一日午後四時まで

10月31日（月）午後2時より　午後のおつとめ
6時より　親子の集い

11月1日（火）午前9時30分より　午前のおつとめ
午後1時30分より　まとめのお勤め

ごぼはんだより

発　行：真宗大谷派 常入寺
富山市東老田787番地
電　話(076)436-0816
ＦＡＸ(076)436-2766
携　帯090-3764-3983
発行責任：青　井　和　成

★長寿者などを対象に自宅からゴボハンへ、ゴボハンから自宅への送迎サービス（無料）を実施いたします。前もって電話をいただければ係のものが迎えにまいります。是非ご利用ください。

お説教は昨年同様　松井　勇さん（福光町）です。
お斎は11月1日あります。

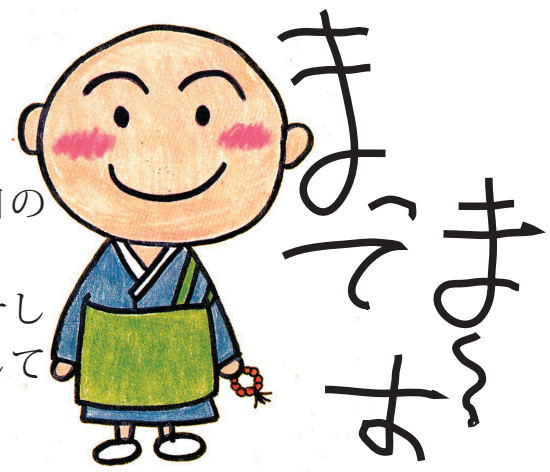
ご近所の方をお誘いの上是非足をお運びください。
住職・役員　心よりお待ち申し上げております。

報恩講案内号

中越地震ミニ写真展
あれから一年
震災ボランティアで知り合った友人から10枚の写真をお借りしました。ぜひ見てください。忘れないでください
期間　10月31日～11月30日
場所　常入寺本堂

親子の集い

親子の集いを報恩講開催中、31日の午後6時より行います。
みんなでカレーを作って食べて、そして楽しく遊びたいとたいと計画しています。



御　正　忌　法　要

十一月二十七日　午前の部　午前十時より
尼講追弔会　午後2時より
午後の部　引き続き　終了は午後4時を予定しています。
※　お昼に尼講の御膳付きがあります。
法話は午前の部、午後の部の後当寺住職がいたします。

老田という地名について

常入寺が所在する「老田（おいだ）」という地名の由来についていろんな説がある。一番定説になっているのは、本年七月に老田自治振興会が発行した『老田郷土史』にも紹介してある、老中の田から老田になったというものである。私はこの説に対しては疑問を抱いている。それは老中の田からくるのであるならば「ロウデン」あるいは「ロウダ」というふうになるのではないかと思うからである。「ロウ」が「オイ」と変化しないのではないかと思うからである。

数年前小杉町黒河の西養寺住職の伊藤さんから「老田というのはオオウダから来ているのでは」と教えていただいた。また近くに歌の森（ウダノモリ）という地名があることにも注目されていた。そういえば東老田には「ウラタンボ（ウダタンボ）」という小字があることが思い出される。

ウダという言葉をインターネットで検索をすると、アイヌ語に泥地を意味する「ウダ」という言葉と、低湿地帯を意味する「ウタ」という言葉があるとでてきた。そういうことからすると、老田は大きなウダ、低湿地帯といういみからきているのではないだろうか。ちなみに歌の森は低湿地帯に出来た森ということになるのだろうか。『老田郷土史』には弥生時代は射水平野は潟であり、老田は低湿地の境界にあたるとある、このことは伊藤説を裏付けることになるのでは、と思う。

「伊藤説」が正しいとするならば遠く昔、この地はアイヌの人々の場《アイヌモシリ》であったことになる。今は多くのアイヌの人々は北海道で暮らす、そしてなかなかアイヌの文化をそのまま伝統出来ずに生活をされている。それは昔アイヌ民族を私たちヤマト民族が北へ追いやったり同化（ヤマト民族化）してきたからだ。近世はアイヌ民族を土人と勝手に認定し、同化政策をアイヌの人々に強制してきた。

「ニホン」の歴史ってなんなんだろうって悩み込んでしまう。

利益（りやく）

人はたえず自分の利益（りえき）を求めて生きる。この現実の社会全体が、すでに利益社会と呼ばれて、利潤追求の機構となっている。さまざまな関係結合の紐帯が、利益的関心に置かれていて、それが近代社会の基本的な要素の一つとなっている。いわゆる利分、得分（もうけ、とく）の関心で成り立っている、といってよい。

宗教においても、人の祈りに応じて利益をもたらしてくれるのが、よい宗教であると考える人がいる。人の祈りにも、集団における共同祈願と個人的な祈りがあるといわれ、たとえば、雨乞い、日乞い、疫病送りとか、息災延命、家内安全、商売繁昌など、多種多様の祈りがある。人は、現実の生活苦からの離脱を求めて祈りつづけ、その恵みとして与えられた恩恵を、ご利益（りやく）というている。

しかし利益ということには、自分が利益を得るということだけでなく、他の人を益（えき）するということ、恵みを与えるということがなければならない。仏教では、仏の教えに生きて得られた恩恵を、自利・利他の益（やく）として明らかにしている。自ら利益を得ることは同時に、他の人びとを利益することでなければならない。それが菩薩の精神であり、実践である。

仏の教えによって得られる利益（りやく）は、金銭上や物質上の利益ではなく、自らの生存在に自覚的に醒さめて生きる、自覚者の誕生である。釈尊は、その誕生のときに、七歩あゆまれて天を指さし、「天上天下唯我独尊（てんじょうてんがゆいがどくそん）」と叫ばれたといわれる。それは、世の中で自分が最も偉いというのではなく、自らのいのちの尊厳性に最も深く目覚め立った叫びを、言い表したものであろう。

その仏陀の教言（きょうげん）に出遇（あ）い、教えに導かれ育てられて、われわれもまた、自らのいのちの尊さに目覚めて生きるものとなるのである。教えのもつ最も深い意味での利益（りやく）は、一人ひとりが、仏の本願に喚（よ）び覚まされて、最も尊いものとして自己を生きる自身の獲得ではあるまいか。そこに自ら人びとを利益して、ともに生きるという、本当の共生の生が開かれるのではないだろうか。